

「選別」の根源 —社会的有用性というまなざし—

高野信治氏 (九州大学教授)

「障害認識を遡る」

藤井渉氏 (日本福祉大学准教授)

「戦力ならざる者の戦争と福祉」

趣旨説明

2016年に発生した相模原障害者施設殺傷事件は、障害者に対する差別や偏見によって引き起こされたとされています。また、重度の障害を持つ国会議員が「特別扱いされている」という声も聞こえてきます。このような差別や偏見が、現在の日本において確かに存在しているように思います。こういった考え方に対して、その起源を探るといふ試みは、「歴史」を考えることが現在の社会に対する認識を深めるひとつの手段となるのではないのでしょうか。

そこで、第9回「歴史から現在を考える集い」では、近世日本を中心に障害の有無による人間の区別・差別といった問題を研究しておられる高野信治氏と、社会福祉学の観点から、障害者福祉の制度を歴史的に研究しておられる藤井渉氏をお招きします。おふたりのご講演を通して、障害者に対する差別や偏見が発生する原因を歴史的に捉え直し、上記の問題を考える場にしていきたいと思います。

(※この催しは、昨年中止になったものを再企画したものです)

◎日時 2021年8月28日(土) 14:00~17:30 (受付開始13:30)

事前申込不要(新型コロナウイルス感染症対策のため、参加者が100名を超えた場合は入場をお断りする場合がございます)

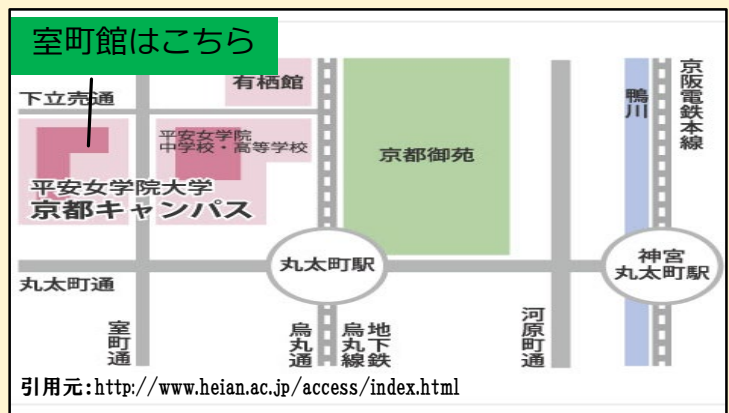
会場整理費500円。※感染状況によっては昨年同様中止になる可能性がございます。

◎会場

平安女学院大学京都キャンパス
室町館2階 201教室

※アクセス

市営地下鉄烏丸線丸太町駅
市バス烏丸丸太町停留所
下車、徒歩5分(右図参照)



お問い合わせ: 日本史研究会 075-256-9211(土休日閉室)

URL: <http://www.nihonshiken.jp/>

Twitter: @nihonshiken1945

◎講演要旨

「障害認識を遡る」

高野信治氏 (九州大学教授)

自立生活や働き手としての経済的な有用性を基準に、自立生活ができない人たちを峻別する見方が近代に生じ、その典型が「障害(者)」とされる。近年、障害者差別解消法の成立(2013)や国会議員への当選(2019)などで、その認識も変化してきたようだが、相模原障害者殺傷事件(2016)の背景には、障害者の社会的価値を否定する意識があり、現代に至るもそれは例外的な眼差しではないのではと、一人の障害者の親として感じる。だからこそ、かかる見方の淵源を探る試みは、一歴史学徒としてやるべきこととも思う。私は日頃、近世・江戸時代を対象に勉強しているが、自活して働くことが国家社会を支える、という有用性観念が、すでに生まれていたのではとの印象を持つ。だとすれば近世段階の有用性が近代のそれと如何に接続するのかが問われなければならないが、当面は近世における〈障害〉(近現代のそれとの異同を考慮し◇付記)をめぐる認識を軸に考えたい。

「戦力ならざる者の戦争と福祉」

藤井渉氏 (日本福祉大学准教授)

戦時下、国民は国家に奉仕すべき存在とされ、国家は戦争の役に立つかどうかで国民の命に優劣をつけてふるい分けた。そのなかで、障害者はどのように見られ、扱われたのか。実は同じ障害者であっても一方では排除の対象とされ、一方では包摂の対象とされた歴史があり、その分断は今日の福祉にも引き継がれたり通底していたりするのである。その歴史から相模原障害者殺傷事件を見た場合に見えてくるものとはいったい何だろうか。これらを障害者福祉の観点から掘り下げることで、「これから」を考えるための視野を広げる一つの機会にしていきたい。

※新型コロナウイルス感染症対策について

会場では、マスクの着用をお願いいたします。また、三密の回避、身体的距離の確保、大声を出さないなど、京都府の定める基本的な感染予防対策にご協力いただけない場合は、ご退出いただく場合もございます。

また、新型コロナウイルス感染症の感染状況によっては、昨年同様中止になる可能性もあります。この点、お含みおきください。